4 種類の悲しみ喚起場面における主観反応の時系列変化

○白井真理子¹・鈴木直人²(¹同志社大学大学院心理学研究科・²同志社大学心理学部)

キーワード: 悲しみ, 主観反応, 時系列変化

In four types of situations eliciting sadness, time-sequence changes of subjective emotional rating

Mariko SHIRAI¹, Naoto SUZUKI²(¹Graduate School of Psychology, Doshisha Univ., ²Department of Psychology, Doshisha Univ.)

Key Words: sadness, subjective emotional rating, and time sequence change

目 的

感情が喚起されても、その感情が永遠に続くことはなく、時間の経過とともに消失する。消失するまでの時間は、様々であり、数分で消えることもあれば、数時間、それよりもっと長期間にわたり続くこともある。感情を理解する上で、このような時間的な変化に関する情報の重要性は以前から指摘されてきたにも関わらず、時間的側面に注目した研究は不足している(Eaton & Funder, 2001; Hemenover, 2003)。

感情の時系列的側面に関する研究において、悲しみは他の感情と比較して、持続時間が長い(Verduyn, Delvaux, Van Coillie, Tuerlinckx & Van Mechelen, 2011)という特徴を持つだけでなく、他の感情と違い、初めの反応に拘束されないという特徴的な傾向を持っている。この傾向をもたらしている要因としては、悲しみが喚起される状況が様々存在するということが考えられる。悲しみを喚起する出来事は、1つではなく、死別時の悲しみの強さや悲しみの持続は、何らかの失敗時に感じるような悲しみとは異なるものであるということを、われわれは経験的に知っている。白井・鈴木(2013)は、悲しみ喚起場面は大きく6場面(死別、自己目標達成の失敗、恋愛における別離、家族の不和、孤独、自己の怪我・病気)に分類され、對自己一対他者、対処可能一不可能の2次元上に位置されることを報告している。このような多様な悲しみ場面の存在は、場面ごとに異なる悲しみの反応パターンが存在する可能性を示唆している。しかしながら、場面の違いによって悲しみ感情がどのような時系列的な変化を生じるかについては検討されていない。

以上を踏まえ、本研究では、悲しみ感情を喚起することが想定される6場面(白井・鈴木, 2013)の中から、2次元の各次元に寄与率が高い4場面(死別・喪失、自己目標達成の失敗、恋愛における別離、自己の怪我・病気)を抽出し、その場面ごとに生起すると予想される悲しみ感情が、時間の経過と共にどのように変化するかを検討した。

方 法

実験参加者: 大学生 33名(男性 11名, 女性 22名, 平均年齢 20.06歳, $SD=1.86$ 歳)

質問紙: 感情の変化を曲線によって回答する評定法(門地・鈴木, 1998)を使用し、ある悲しみ喚起場面での、主観感情(快-不快, 緊張-弛緩)変化を曲線で記入させた。回答欄は、16 cm × 22.2 cm の長方形から成っており、縦軸が感情の変化、横軸が時間の流れ(悲しみの出来事が起こる4日前, 起こってから20日間, 30日後, 半年後)を示していた。縦軸の中心から横軸と平行に引いた線を基線とし、感情が変化していない平静の状態を表した。

手続き: 悲しみを喚起する4種類の場面である“死別・喪失”、“自己目標達成の失敗”、“恋愛における別離”、“自己の怪我・病気”についてそれぞれイメージ後、質問紙に回答を求めた。

結果および考察

データ処理: 記入した曲線を2マスずつに分け、出来事が起こる前は2ブロック、出来事が生じたとき(イベント)を1ブロック、出来事が起こった後は10ブロックとした。各実験参加者のデータは、各区間の曲線の基線からの高さ(mm)をとした。

悲しみを喚起する4種類の場面に対する、快-不快感(Figure1), 緊張感(Figure2)について、ブロックごとに全実験参加者のデータの平均を求めた。

Figure1 4場面における快-不快の時系列変化

Figure2 4場面における緊張-弛緩の時系列変化

結果より、出来事が生じた後全場面において、不快にふれ、緊張が高まったのち、快方向へと向かい、緊張が低下することが示された。しかし、不快への振れ幅・緊張感の上昇程度は、場面ごとに異なる傾向を示した。“死別・怪我”と“恋愛・目標”は快-不快、緊張-弛緩の時系列推移において、それぞれ似た時間的経過を示した。よって悲しみには、対処不可能であり、自己に関する状況である死別・怪我の時系列変化パターンと、対処可能であり、他者に関する状況である恋愛・目標の時系列変化パターンという2種類の時系列変化パターンを持つ、質の異なる悲しみが存在する可能性が示唆される。

引用文献

白井真理子・鈴木直人 (2013) 悲しみ場面の分類と構造 感情心理学研究, 20, 105-112.